

日蓮聖人御帰倉より身延御入山まで

松 木 本 興

日蓮聖人は、久遠の本師釈迦牟尼仏の本弟子として、流季末法に於ける法華經弘通を以て根本使命として居られ、遣使還告・塔中別付唱導の之首として、貞応元年（一二三二）二月十六日（大陽曆四月六日）法華經有縁の国たる日本国に応生。建長五年四月二十八日、（一二五三、大陽曆六月二日）立教開宗、留難重疊の御化導に終始せられたる中、文永十一年（一二七四）三月佐渡より鎌倉に帰られ、五月十二日鎌倉を御出発、六月十七日「かりそめ」の庵室成りて入山なされ、弘安五年（一二八三）十月「いかなる主上女院の御意なりといえども山の内を出でまじき」身延を發足され、十月十三日（大陽曆十一月二十一日）池上に御入滅せらるゝ迄の御生涯を。幼年期：貞応元年一二三二―天福元年一二三三五月十二日。修養期：天福元年五月―建長五年四月。伝道期：立教開宗―御入滅迄：と三分し。更に伝道期を、序分：鎌倉期、正宗分：佐渡期、流通分：身延期の三時期に区分する事は自他共許の事であるが。正宗分の佐渡期中に於いて序・正・流通の三時区分を示す事は姉崎正治博士の著「法華經の行者日蓮」の中に主として文永九年（一二七二）の開目鈔を中心として生死一大事血脈抄、草木成仏口訣、阿仏房御書、佐渡御書、得受職人功德法門等の人開顯を示せる時期を序分とし、次で文永十年（一二七三）四月二十五日の觀心本尊抄を中心として、二月十五日の法華經内証仏法血脈、妙法曼荼羅供養事、五月十七日の諸法実相抄、全月の如説修行抄、閏五月十一日の頸仏未来記等の主

として法開頭の時期を正宗分中の正宗となし。更に文永十年後半に当る七月八日（太陽曆八月二十八日）本尊始頭を中心として七月六日の宮木殿御返事、八月三日の波木井三郎殿御返事、当体義抄、翌十一年正月の訶責謗法滅罪抄、全十四日の法華行者値難事、二月十五日の授職灌頂口伝抄等御選述の時期を流通分とする。是は正宗分中の三時期であつて身延期は御一代中に於ける総流通分である。之は私見であるが上行菩薩日蓮聖人が釈尊の本弟子として、末法五濁闢諍の時に於ける法華経弘通を使命とし給ふより考へて、過去遠々劫以來現在の修養期迄を序分とし、立教開宗より佐渡期の終迄を正宗とし、此の正宗中に留難に遭はるゝ度に開闢し給へる別頭の大法を結束して末代に流布せしむべく其の中心拠点としての根本道場を奠定せられたのが総流通分たる身延期と拝する事は出来ないだろうか。

今試みに昭和定本日蓮聖人遺文一・二巻に収められた御遺文に依るに

序分―鎌倉期―建長五年（32）―文永八年十月（50）

―九十一通（含戒体義）

正宗分―佐渡期―文永八年（50）寺泊御書―全十一年四月（59）未驚天聰御書―五十二通

―一四三通―一八〇八頁

流通分―身延期―文永十一年五月（59）―弘安五年（61）（一四四宮木殿御書―四三四波木井殿御書）

―二九一通―一一二五頁

これに見るも足かけ二十二年間に於ける鎌倉（修養期の戒体義をも含めて）佐渡期合して一四三通八〇八頁の御妙判に対して、生活環境の相異も勿論あるが前後九ヶ年間に二九一通一一二五頁に及ぶ御遺文を拝し得る事は注意しなくてはならない。聖人の教義・宗要の所謂本化別頭の教観の顯すべきは已に佐渡に於いてなされて居るから身延に於ける御指示は法華経の生活化にあられた、即ち生活と宗教の面に関する部類が多いのであるが、

此の身延へ籠山せんとする御心持はいつ頃起されたものか、

始めは身延と限定せず、かつて御遊学の当時、親しく見聞せられた伝教大師の比叡山、弘法大師の高野山にも劣らざる山中に身を隠さんとの御心持はいつ頃から起されたのか。これについては今更ら事新らしくいふ迄もなく已に先師・先輩の人等の云ひつくせる如く、文永十年一月二十八日の最蓮房への祈禱経送収(昭六八九)に依るに。

御山籠ノ御志シノ事凡そ末法折伏の行に背くといへども病者にて御座候上、天下の災・国土の難・強盛に候はん時、我が身につみ知り候はざらんより外は、いかに申候とも国主信ぜられまじく候へば日蓮尚籠居の志候。まして御分のさこそ候はんずらめ。仮使^{たとへ}山谷に籠居候とも、御病も平愈して便宜もよく候はゞ身命を捨て弘通せしめ給ふべし。

と、示されて居る。文永九年二月の頃、日蓮聖人の教に帰し、四月八日妙法の本円戒を授かつてからは益々信解増進した最蓮房が、恐らく新春の挨拶に托して、私も末法々華経の行者として折伏弘通に従事すべきであるが病身の故に人里離れた山谷に所して法華経を修行したいと思ふが、といふお伺ひに對しての御返事であつて。山籠といふ事は末法折伏弘通の行には背くが病者では到底堪へ得ない事でありましょう。日蓮でさへ、予想外の事でもない限り、いかに日蓮が申しても北条幕布が信じようとは思へないので何処か山の中へ這入らうと思ふて居る。況やお前さんとしては無理ない事と思ふ。との意味で、最蓮房の山籠の意志あるに托して御自分のお心持を示されたもので、法華経の行者として今生になすべき事を成し終つたら山林に籠居すべしとは已に文永十年早春に決意せられて居たのである。

更に此の御遺文と照合して拝すべきは、建治元年七月十二日の高橋入道殿御返事(昭一〇八八)で

真言宗と申す宗が、うるわしき日本の大なる咒咀の惡法なり。弘法大師と慈覚大師此事にまどいて、此の国を亡さ

んとするなり。設^たひ二年三年にやぶるべき国なりとも、真言師に祈らす程ならば一年半に此国せめらるべしと申し聞かせ候き。たすけんがために申すを此程^{これほど}あだまるゝなれば、ゆりて候し時さどのくにより、いかなる山中海辺にもまぎれ入るべかりしかども、此事をいま一度平ノ左衛門に申しきかせて、日本国にせめのこされん衆生をたすけんが為にのほりて候き。又申しきかせ候ひし後は、かまくらに有るべきならねば足にまかせていでし程に云々と、一年前鎌倉を離れし当時を追懷して居られるが「ゆりて候し時さどの国より、いかなる山中海辺にもまぎれ入るべかりしかどもいま一度平ノ左衛門に申しきかせて」と述べられて居られる所から推するに、入山籠居は佐渡在島からの予定の事であつたと思はれる。種々御振舞御書(昭九七九)撰時抄(昭一〇五三)光日房御書(昭一二五五)報恩抄(昭一二三九)下山御消息(昭一三三五)等の御文を拝するに、三諫容れられざるが故に世を遁る。の意が強調せられて居るが、「三諫」とは儒教的行為に托せられたもので、法華經の行者としては第二義的な行為であり、よしや世法即仏法の御主義に依るものとしても、第三諫に其の御主張の容・不容をかけられたとは思はれず、「我が身につみ知り候はざらんより外は、いかに申し候とも国主信ぜられまじく候へば日蓮尚籠居の志候」とは、佐渡以来変らぬ聖人の御心持であつたので、「上下共に用ひさりげに有る上、本より存知せり、国恩を報ぜんが為に三度までは諫曉すべし。用ひずば山林に身を隠さんと思ひし也。(昭一三三五下山御消息)で、正宗より流通に移る結前生後として御化道に一ツのけじめをつけられたのが第三諫であつて軽視する事は許されないが、これに成功しなかったから遁世を決めたのではなく、成功するなどは本より考へず、世上日蓮聖人は政治に失敗し失望落膽の結果山に入られたといふが如きは皮相な考へとしか思はれぬ。「いま一度平ノ左衛門に申し聞かして」の用件をすますと同時に籠山の心仕度にかゝられたのはあるまいか。

我等が本師釈迦牟尼如来は在世八年之間折伏し給ひ、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年。今日運は二十余年の間権理を破す。其間の大難数を知らず。仏の九横の難に及ぶか及ばざるかは知らず。恐らくは天台伝教も日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし。(如説修行鈔、昭七三六)。(聖人御難事、昭一六七二同意)と示し給ふ如く、建長開宗以來「兩度の御勘気、遠国に流罪せられ、竜口の頸の座、頭の疵等、其外悪口せられ、弟子等を流罪せられ、籠に入れられ、檀那の所領を取られ、御内を出されし、是等の大難には竜樹天台伝教も争でか及び給ふべき。(前引如説修行鈔連文)と御自ら述べ給ふ如く留難重疊の二十余年であられ、然も伊豆も佐渡も他動的に流罪の身としての遷居であったが、此度鎌倉を離れるといふ事は、自ら選び給ふ自動的行為であられた。従つて是を發表し給ふや。「今山林に世を遁れ、道を進まんと思ひしに、人々のことは様々なりしかども、旁々存ずる旨ありしに依つて当国当山に入りて已に七年の春秋を送る。(四条金吾殿御返事、昭一八〇〇)と、身延へ入られて七年目の弘安三年十月八日に述べられて居るが、「人々の語様々なりしかども旁々存ずる旨あり」との御文意は、鎌倉をお去りになるなら私の方へと、下総の富木、富士山麓上野の南条、伊豆に土地を有して居たらしい四条金吾、武藏の池上、甲斐の南部等の諸氏の招請があったと古來伝へられて居るが当然の事と思はれる、「旁々存ずる旨」とは高橋入道殿御返事を拝した氣持からすれば、日蓮が行つた為に迷惑をかけてはならないので、それを避けようといふ御心持ではなかったか、それと比較・高野に劣らない深山が欲しい、そういう御氣持で、甲斐大井ノ庄の生れである日興上人並に今諏訪の久本房等の勧めで甲斐の国へと志されたものと思はれる。

京都に居らるゝ三木浄達君が身延在学中、日蓮聖人の歩まれた鎌倉から身延への御足跡の霊場を特に昭和十二年五月十二日鎌倉を發ち草鞋に身を托して參拜し其の紀行文を棲神と身延教報（昭和十年十月号）へ投稿された事がある。惜しむらくは六月二十四日鎌倉發全二十九日身延着の日程を選んで頂くと氣候なり山野の景色が日蓮聖人のお歩きになられた頃に近かつたのではないかと今にして思ふのは欲が深過ぎる上に、六日ならで八日九日の菖蒲といふところか。更に古いものとしては、高祖年譜攷異（日蓮宗全書中日蓮上人伝記集所収）あり、別頭統紀七之卷の此の間の記事は再考を要すべきものあるを見る。御遺文に

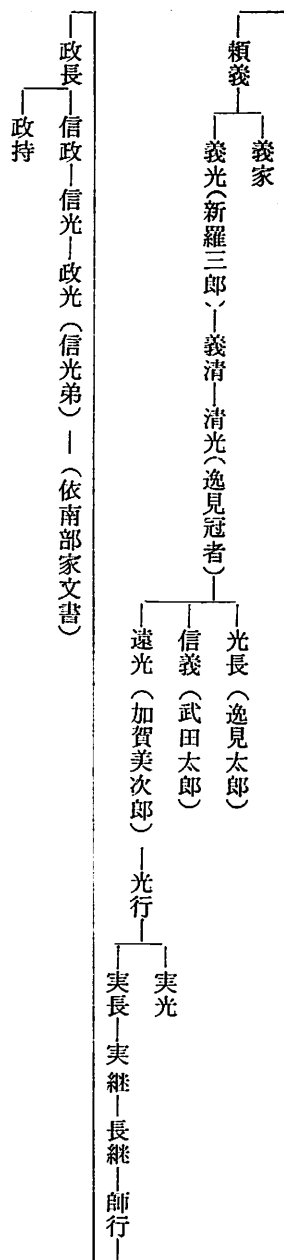
けち（飢渴）申すばかりなし。米一合もうらず。がし（餓死）しぬべし。此御房たちもみなかへして但一人候べし。このよしを御房たちにもかたりさせ給へ。

十二日さかわ（酒輪）、十三日たけのした、十四日くるまがへし（車返）、十五日ををみや（大宮）、十六日ななぶ（南部）、十七日このところ（波木井郷）。（富木殿御書、文永十一年五月十七日、昭八〇九）

と、先づ道中を通じての食糧の困難を述べ、次で行程を示されて居るが、お書きになった順序から云へば、行程が先きて、道中の困難は最後に添書されたものではないかと惟はれる。此の行程については、三木君の紀行文に「宿から宿への道程が略十里内外で、極めて自然の一日（行）程の距離である。」と書て居らるゝが鎌倉を出られてから六日間何等左顧右盼することなく粗十里づつを歩まれて波木井郷に着かれて居る点から見ても、波木井の郷主南部六郎実長公を頼りとして鎌倉を出られた事が含点出来る。「十二日酒輪」の輪は現在には句につくる。日蓮聖人は、別頭統紀卷七に依るに、興・向・頂・持・心の五弟子及び久本房、熊王四郎は荷宰領として、七名を随へられて十二日鎌倉を出発せられ、同夜は酒輪河畔の地藏堂に泊し（現在小田原市酒匂法船寺は其の靈跡）、翌十三日は道を足柄路にとり、

同夜は駿東郡竹ノ下鈴木繁八の家に宿、弘安五年九月十四日亦此に宿す子孫尚存といふと年譜攷異は記して居るが、三木君の記に依ると子孫も文献も無いといふて居る。小田原藩の弾圧に累せられた為といふ。加藤清正が小田原征伐の時此の地に来り、一堂を建て、御霊跡を顕彰し後慶応年間本門法華宗の日有師が復興して自ら開山となつたのが現在の常唱院であるといふ。十四日の車返といふのは、沼津三枚橋の近くに在つたと伝へる三枚橋道場に御一泊なされといふ。十五日大宮といふについて、別頭統紀は、十三日車返に止、駿州富士郡大宮ノ庄野中村に由井氏五郎入道なる者あり日興の旧識なり。日興これに通ず入道出で迎へ大に喜ぶ、十四日由井入道が家に入る。入道受戒得法す、後に高祖の木像を造て之を崇め宅を捨て興に授けて寺となす。興曼荼羅を図して之を記す今の妙覚山大泉寺是れなり云云といふに依れば、十三日の竹ノ下を抹消して車返となし、十四日に由井入道宅とし。十五日を同じく大宮ノ庄柏酒に泊すといふは何ふした事か。若し柏酒に泊したとすれば、由井入道宅は御立寄り程度ではないか、十六日の内房の本成寺も御一泊といふ事になつて居るが（統紀）年譜に「十六日内房に慰ふ一老尼あつて饌を供す」といふのが無難ではなからうか。伝ふる所内房四詠（聖人・西行・日遠上人・草山元政和尚）なるものもあるも、筆者には歌道はわからないが、富木殿御書に「十五日ををみや、十六日なんぶ」といふ御文に依れば内房に御少憩で世にいふ所の御掛錫の霊場であるまいか。姉崎博士が「十六日は南部郷内房で信者の家に泊し」といふて居るが、内房は南部郷ではない。「十六日なんぶ」と富木書に記されて居るのは現在の山梨県南巨摩郡南部町南部の地で内房は静岡県庵原郡に属して居る。南部は南部六郎実長公（俗称波木井公）の父源光行此の地を領し南部氏と称してから子孫皆南部氏を姓とするに至つたので現に此に城趾と屋敷跡を存して居るが、其の系譜を見るに、

清和天皇―真純親王（清和天皇第六皇子）――経基（六孫王と号し、始めて源姓を賜ふ）――満仲―頼光―頼信――



此の南部家は実継(地引御書に、次郎とのらの御公達といふは此の彦次郎実継公を指す)公以来政光公に至るまで累世南朝に忠節を尽し悲想なる絵巻を展開したのであるが、元中九年即ち北朝明德三年(二三九二)後亀山天皇將軍義満と和を結ばれて京都に入り嵯峨大覚寺に居し、三種の神器を後小松天皇に譲り落飾して後亀山院と称された。此の時南朝の臣にして降伏する者多く敵する者は滅亡する有様であった中に政光公は嫡家南部守行(森岡南部氏)が足利義満の密命を帯しての勧誘にも応ぜず、二君に仕ふるを恥ずとして甲州波木井郷等の領地を捨て、南朝より賜りたる奥州八戸に退いて孤忠を守り爾後子孫其の節を守り今日に及んで居る。日蓮聖人の時代には此の南部の地も波木井南部家の支配下にあつて嫡家南部氏の屋敷だけが残つて居たのではないか。聖人は此の地の大日山妙楽寺へ泊され、寺主宗を改めて延寿山妙浄寺といふ、境内に現に御硯水の井戸を存す。十七日横根(桜清水の井あり寺を実教寺といふ)相又に粟飯の霊場大石山正慶寺があるが、果して聖人が現在の相又河畔の正慶寺の所を通られたものか疑問である。正慶寺は粟飯を聖人に供養した史正左衛門の妻後の妙了日仏尼が現在の処に建てたのかも知れないが、聖人は横

根から樫ノ木峠を通られ、中山の尾根伝ひに現在の梅平に出られて南部家の館に入られたものと思はれる。波木井城即ち梅平城に關しては、享保四年（一七一九昭和三十七年より二四三年前）八月八日、八戸若狹守の使者として西村吉左衛門が遠野発足、江戸を経て同二十六日身延に着し、二十七・八両日本山参拝、二十九日本坊の案内で梅平へ趣き、実長公御屋敷旧跡、お城、実長公墓所、等に詣で、南部に行き、御城山、嫡家屋敷跡等を視察し、録高を記して波木井郷二百石、南部六郷の録高として本郷六百石、塩沢二百石、成島四百石、大和二百五十石、中野三百五十石、南部四百五十石等と記して居る。（西村文書南部家文書二一）又宇夫方平太夫が八戸南部家の御代拝として身延へ使した記録も南部家文書に収められて居る。

実長公は彦三郎世人三郎と呼ぶ故に後六郎と称すといふ。聖人の御賜書の中に、甲斐国南部六郎三郎殿御返事といふのは新旧両名を併称したものでらう。

聖人が中山尾根伝いに梅平の南部家に入られたとすれば、逢嶋の聖人と実長公との霊山の契約は何ふなるかといふに霊山の契約は慥にあったと思ふ、又無くてはならない事だが五月十七日ではなくして六月十日前後か、或は六月十七日開闢会の当日ではなかったかと考へざるを得ない。南部から身延へは略二里であるから、十七日の午後は割合に早く南部家に着かれた聖人は、早速筆を執って手紙を書かれたのが前引の富木殿御書であるが、前引の連文に

いまださだまらずといえども、たいし（大旨）はこの山中心中に叶て候へば、しばらくは候はんずらむ。結句は一人になって日本国に流浪すべきみ（身）にて候。又たちとどまるみ（身）ならばけさん（見参）に入候べし。

恐々謹言

十七日

日蓮花押

ときどの

と、述べられて居るが。十七日此の波木井の郷へ着きましたが、未だ何ふなるかわかりませんが、大体此の山中が気に入りましたので当分は居る事になりましたが、つまるところは一人法師になって日本中を流浪する様な事になりましたが、此所に永く留る様な事になりましたら、お目にかゝりましょう。といふ御文意と拝する。鎌倉出発の当初から身延山を永住の地と定めて居られたのなら、其の身延の地波木井郷へ到着せられたのに「いまださだまらずといえども」といふ御言葉は無い筈である。甲州は山深い処と聞くから、兎に角甲州へ行つて見様、甲州には南部氏が居らるゝから一住南部氏を頼り、南部家に着いてから後々の事は考へ様として、毎日略十里宛を歩かれてまっしぐらに波木井郷まで来られて、南部の館から眺めた身延の山は実に素晴らしいので「大旨は此の山中心中に叶て候へば、しばらくは候はんずらむ」といふ感懐になられたものと思はれる。だから五月十七日は身延入山でもなく、当時の道筋から勘へて逢島迄夷長公が出迎えたとは思はれない。一ヶ月後にお這入りになった御庵室は、岩の間松はさまの下に造られた。屋根は宣ぶき四壁は木の皮をはいだ物を張りつけた三間四面十二本の柱といふかりそめの半作の御庵室といえば聞えはいひが山小屋が、五月十七日霊山の契約があつて約一ヶ月費して建てられたものとは思はれない。夷長公は先きに挙げた波木井郷と南部六郷丈でも二千四百五十石の財を持ち、其外小田・船原・相又・福士・楮根等の領地と広大な山林を有し、八ヶ岳山麓にも領地が有ったと思はれるのに、一ヶ月を要して仮半作の小屋しか出来なかったとおかしい。説教師が、庵室造営には一ヶ月を要するだらう、其の間を利用して甲州を遊化したといふのは訂正しなくてはならないだらう。「しばらくは」と記された通り、一週間程は南部館に滞在されて、五月二十四日、扶桑沙門日蓮述之として發表されたのが法華取要抄であるが、関本恩師は甲州遊化中の作ではないかといはれ、或師は鎌倉で

御述作波木井郷で発表といふて居るが今は南部館として置く。そして二十五日頃波木井を發ち、土地を求めて、西郡にしごほ筋から信州路に入り、踵を返して東郡ひがしごほを経て約二週間、やはり身延以上の処はない、身延こそ法華經の道場建立の地として最も応しい山だとして、再び梅平の館に草鞋を脱がれたのは六月十日頃ではないか。此の甲州御遊化について御遺文に一言も書かれて居らないし、信憑すべき古文書もないので單なる伝説に過ぎない、と一蹴する人も居るが、伝説も荒唐無稽なものは勿論不可だが、史実と照合して信じ得る伝説は尊重すべきだと思ふ。

再び聖人を迎へた南部実長は何んなに喜ばれた事であらう。早速地を相し、聖人の御指示のまゝに庵室造営に着手し、その梅平への帰るさに現在の総門の辺りから身延の山を振り返りこゝに靈山の契約があつたのを弘安五年十月七日の波木井殿御書は五月十七日の事としたものだらうが、実長公としては五月十七日自分の館に聖人をお迎えした時に身延山寄進を心中に誓つて居た事であらう。因みに南部家文書中の西村吉左衛門覺書に次で、日裕（身延山第三十四世）書状が収録されて居るが、それに依ると身延山十三里（六丁一里・九丁一里が三十六丁一里に非ず）四方の山開入の外に大城山・相又山・赤沢山の松の用木を身延山の用木として実長公より御寄附になり、後穴山梅雪南部家の旧領を領有する時もこれには手を触れず、家康の代になり下役人等が之を奪取すべしと主張せるも江戸公儀之を許さず、身延山の大堂、或は修補等にも右三山の用木にて建つ云云といふ。尚実長公身延寄進状は聖人滅後永仁年間になつて居るが、これは後々の為に文書として残されたもので御寄進の事実は聖人御入山当初であらう。